

足でとんとん拍子で伍長に進級した。

八月二十三日、終戦の詔勅を聞かされた。その少し前に阿南陸軍大臣の最後の一兵まで戦えとのこと。これだけ潰滅的な状態になっているにもかかわらず、何という残酷なことだと腹立たしくなった。

一応中隊の皆の気持ちとしては内地に帰っても進駐軍がいて、今まで日本軍がやってきたことのように苦力に使われるだろうし、もう内地に帰らないと決定した。

だが、その後に情勢が好転したので、中隊全員、意志をひるがえし帰るということになったが、すぐ帰ることも出来ず、約一年ほどの捕虜生活が始まった。

また、長年中国においてあらゆる無謀なことをやってきた日本人に対し、蒋介石総統の「うらみをもってするに徳をもってすべし」と、何と温情ある言葉だろうか。

捕虜生活中も民家の仕事に人夫にゆき、真面目に一所懸命に働いて、毎日指名をもらい、毎日芋めしを腹一杯食べさせてもらって、病気に出勤出来ない同僚に私の配給分をまわしてやるなどして、復員の日を持った。

昭和二十一年五月二十三日、鹿児島港に入港、復員した。

戦争というものは二度としてはいけない。どうか世界の如何なる国、大きくはこの地球上から戦争というものを皆無に出来ないものだろうか。それをひたすら祈り、あわせて一口の冷水も口にする事もなく、血まみれになって死んでいったあの友この友の、ありし日を偲び、心より冥福を祈りたい。

苦しい一等兵

広島県 平田昌次

昭和十七年十二月二十五日、父親と役場のかたにともなわれて入営、西部二部隊二中隊二班にはいったのが軍隊生活のはじめです。

小生は会社の外国部の仕事で中国に十七歳より兵隊にいくまで、四年近く働いていました。徴兵検査は上海で受け第一乙種合格でした。鎮江、楊州、秦皇、高部をへ

て、広告係の中国人と一緒に満州に帰ったとき電報を受け、上海と大阪で見送りをいただき入隊しました。

その時、痔が悪かったのですが、なんとかして一週間ほどでなおり、一月十三日広島駅発、朝鮮経由で満州山海関を通過して南京鎮江へ帰ったときは古巣へ帰ったような気がしました。

トラックに乗って塩城へ到着、六か月の初年兵教育を受け、青年学校へ行っていないのでいつも打たれるのでぼけているような教育隊も済み、一等兵になりました。

七月一日、四中隊教育隊擲弾筒班より教育係の勝田兵長と一緒に新編成の五中隊へ、四中隊からも下士官や古兵も来ておられた。五中隊は一中隊より四中隊から精銳を集めて清水中尉が中隊長となり、清水中尉には帰るまでお世話になりました。

小生は中国語が少し話せたのでわりに楽をさせていたいただきました。中隊にはいってからは失敗がないかぎり中隊長と一緒にだったので、打たれることも少なく、作戦になりますと中国語が役に立ち三、四回討伐に出てもいつも役立っていました。小生は村上曹長の当番兵を勤めて

いました。

鎮江に集合して作戦のため丹陽まで汽車で行き、黄金山の敵をさがした。隊長殿は訓示で皆んな命をまかせてくれと。相当強敵の国府軍とのことである。雨のなか、前の兵隊の白布を目当てに行軍が始まった。夜間十時頃、中国人をみつけ黄金山到少里まではと聞きますと七、八里といえます。中国人のいう七、八里は日本里の一・五里ぐらいです。初年兵の自分が隊長に申しますと、隊長はとまれといって准尉と話しておられました。衛兵を作って中国人を見張り、全員大休止となり、五中隊のみ民家に泊まることとした。一軒に十〜十五人が藁を敷いて寝ました。

朝五時半起床、中国人を道案内に出発、雨もあがって全員八時前に黄金山のしたにつき、中国人は逃げたので、小生は山のうえにあがってみると、敵も丸くなって朝食をとっておりました。

中隊長に報告、全員食事をやめて山のうえに重機、軽機、小銃、擲弾筒をあげ準備終了、「うて」の命令で一斉に攻撃、三十分ぐらいの攻撃で敵の半分ぐらいが逃亡、

友軍は追撃した。友軍の飛行機も来援して戦果があまりました。

四国から来た今井一等兵と小生は四斗かご三杯の小銃弾、小銃二十丁ほどの戦果でした。時々進撃が止まる時、最後に行く自分は民家に白米の飯があったのでむすびをつくって中国兵にも食べさせ自分も食べた。三、四日行軍した時、村上曹長が足をくじいた。

十八年十二月、五中隊は龍玉廟へ進駐、曹長は大隊本部に帰られたので、小生は中隊指揮班の一員として川上登上等兵と一緒に龍玉廟へ行き、日本側についていた中国和平軍について、中国兵の当番兵つきで中国語の研究をおこなった。

昭和十九年四月十五日、龍玉廟を出て鎮江に集合、会社の課長が二等兵で飯あげに来ており、第五二大隊に入っている安長上等兵と三人で話しをしました。課長は前に教育召集があったので将校当番とのこと。五月十八日頃、莊馬庄に到着、大田軍曹、渋谷軍曹と小生は支那服とピストルをもらい斥候に出る。

敵兵三人馬に乗ってくるのであい、ピストルを馬に

向けて発射、馬から落ちたところを逮捕する。中隊に連れて帰り質問するも返事がないので本部より専門の通訳を願ったところ、捕虜の一人は少尉、二人は伍長の由。敵は約三十万いることが判明する。各隊とも小隊斥候をだしたが、五中隊の方が一番明確とのこと。明けて十九日より三昼夜の強行軍で蚌埠へ。

ここでは残留部隊の人がそら豆のあんでは餅をつくって待っておられ、おいしかったことが忘れられない。入浴して寝につき、一昼夜眠りました。

五月十九日、蚌埠出発、開封を過ぎ新郷につき、五月二十五日漢口へ向けて新郷出発、四十師の通ったあととはひよこ一匹おらず、二、三キロ外の道を行くと食糧も十分で、六月二十四日全員無事漢口に到着。

六月二十六日漢口出発、汽車にて岳州をへて新市の河を渡ったとき、はじめてB25に見舞われ、空襲戦にて小銃、軽機、重機を空に向けて射撃をした。重機、歩兵砲隊の馬がおもに攻撃され、半数以上の軍馬がたおれ、明日からは驟馬を集めて夜行軍することとなる。夕方より行軍がつづき、七月二十九日寧郷攻撃。朝河を渡り、道

のしたを通して石橋のある二百メートル手前地点で、
井班長以下十五人の真正面のトーチカからはじめて聞く
音を立ててソ連製プロニングが攻撃してくる。

砲兵隊の三発目がトーチカのなかにはいる。また中隊
長命令で、各個前進、はじめて最後の突撃。一人に弾が
あたったが突撃成功、谷口班長の手榴弾がトーチカには
いって一段落。

七月三十日、福田班長戦死により夜、告別式後、火の
番に着いたのち、玩江地区の警備、終戦となる。

死んだ方が楽、生と死は紙一重

静岡県 松浦 貞一

(一) 死んだ方が楽になると思ったこと

血豆が破れて編上靴の上に泡が出た

武漢攻略作戦中のこと。揚子江安慶に上陸、六安を経
て信陽への行軍中の三日目か四日目だった。

重装備六十キロに軽機関銃、自分の体重以上の装備に

足の底豆が破れて靴のうえに赤い泡が吹き出してきた。
靴のなかはヌラヌラ、痛さに涙も出ないつらさ。今思
いだしてもゾットする。

底豆の治療は野営の時、衛生班に行きヨーチンをもら
うだけ。

痛さとつらさを思い出すだけで身体がふるえる。よく
も耐えたと思うこの身体・耐えさせられたといった方
が本当かも知れぬ。

生水を腹一パイ飲みたい

信陽への行軍が続く。乾ききった大陸の灼熱の炎大下
四十度をこすなかの行軍。我々歩兵は字のごとく歩く兵
隊、歩くしかありません。重装備六十キロ、軽機関銃を
かついで水筒に一杯の水を携行、大別山系を三十キロ以
上の強行軍でした。

汗とはこりにまみれ上衣ににじみ出る汗は白い塩と
なって浮きでてくる。一滴の水もおとしい。最後の水筒
の水を手のひらでたいたいてなめる。今思えば酒の好きな
人が徳利をさかさにして手のひらでたいたいてなめている
あの姿と同じだった。